

## 池島・福万寺遺跡 09-2 の調査

2010年11月6日

### はじめに

東大阪市と八尾市にまたがる池島・福万寺遺跡では、恩智川治水緑地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を1981年以来継続して行っています。

今回の調査は2009年度から開始していますが、今年の10月下旬になって弥生時代の竪穴式住居跡が検出されたため、急遽、同時併行で調査している池島・福万寺遺跡 09-1 の調査の現地公開の日に合わせて、皆さんにその成果を見ていただく事にしました。

池島・福万寺遺跡は、継続してきた調査により、弥生時代から現代に至る水田などの耕作地の変遷が広い面積で確認できる遺跡として有名になってきました。

また、弥生時代から古墳時代にかけての各時期で、人が住んだ跡ではないかと考えられる、穴などの遺構や、土器などの遺物が集中する地帯が幾つか確認されています。しかし、直接人が住んだ証拠となる住居の跡は、1990年度に確認された古墳時代後期の竪穴式住居後以来、確認されていませんでした。

今回の竪穴式住居跡の発見は、同遺跡で20年ぶりの事となります。

### 住居跡が発見された面

住居跡が発見されたのは第13面と第13b面と呼んでいる面です。その間にある第13層は、当時の地表面に形成された土(土壌)や水田などの耕作土層で、第13面で検出された住居1は地形的に高い所で突出しており、第13b面で検出された住居2は後からできた水田の耕作土で削られていたので、実質的にはどちらの住居も第13面が地表面であった期間のうち早い時期に同時に存在していたものと考えています。

その面の時期は、まだ、出土している土器を詳しく観察する時間がないので、確実な事は言えませんが、弥生時代中期の中頃ではないかと考えています。

紀元前2世紀頃、今から2100年ほど前の事です。

もう一つ下の面、第14面の上はかなり激しい洪水で堆積した厚い層があり、その前後では川の流路や地形が変わるほどの洪水であったようです。

その結果、水田などの耕作地は全滅に近い状態になった事でしょう。

そして水田や水路が再建される始めの時期に2棟の住居が作られ、どちらも建て替えられる事なく廃絶し、その跡も水田になっていきます。

想像ですが、もしかすると耕作地を再建する際に、その拠点として作られた住居であるのかも知れません。

今のところ近くにたくさんの住居が集まり、「ムラ」のような形をなしていたようではなく、二つの住居が耕作地の中にポツンとあるような感じなので、そんな印象を感じました。

### 住居跡の説明

#### 住居1

現地公開の時には、ほとんど調査し終わり、残りの形しか見ていただけませんが残念です。

小型の住居で、竪穴の形はかなり不整形で五角形のようにも見えました。直径4mほどです。

床の中央には炭化物がたくさん入った四角い穴があり、炉の跡と思われます。その炭化物に半分埋もれるように上が平な石が一つ置いてありました。火にかける土器を置く台でしょうか？

柱を建てた跡と思われる深めの穴は、その炉跡の両脇に二つありました。二本柱の住居だったようです。

竪穴の周囲には掘った土を盛って、堤のように巡らしています。後の層に削られる事の多い竪穴式住居では残る事が少ないのですが「周堤」という竪穴に水が入るのを防ぐ施設です。

#### 住居2

平面形は割りときれいな円形で径7mほどです。弥生時代中期の平均的なかたちです。

その内側が幅30cm~60cmほどの平端部を為したあと、また内側に下がる段があります。「ベッド状遺構」と言われる施設で、寝床であるとか、物置であるとかの説があります。

床の中央には炉跡と思われる、炭化物がぎっしり入った四角い穴があります。ただし、その底の中央に一段と深い部分があり、そこにも炭化物が詰まっています。

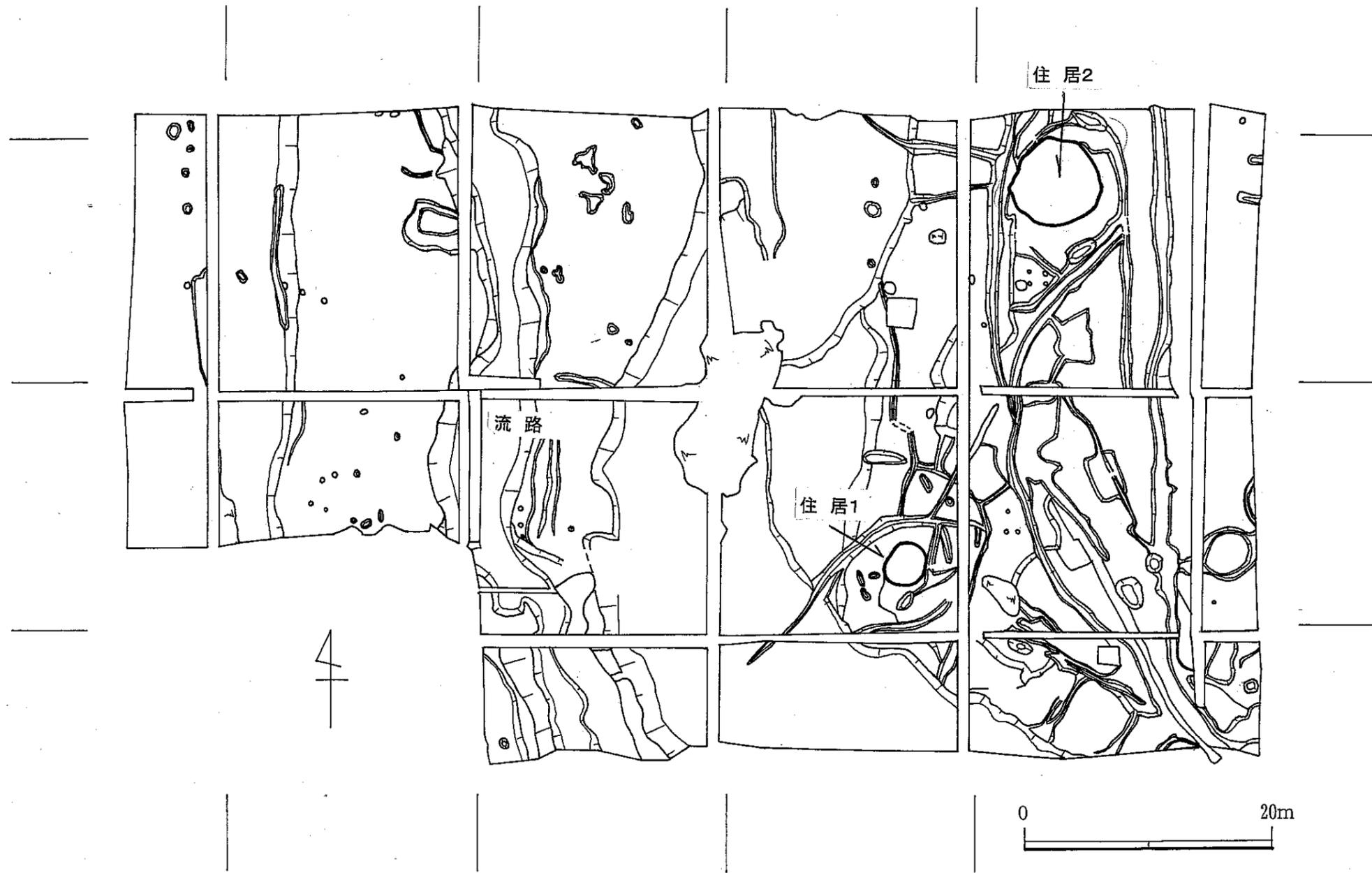
他に床面に散在している穴から、当初は五本柱ではないかと考えていましたが、半分に分割して掘ってみたところ、柱を立てられるほど深い穴が四つ、正方形に近い形で並び、四本柱の住居であったようです。

4点ほどの土器が床面の上に残っていました。壺や高坏のようですが、完全な形のものはありません。住居で使用されていたものとは断言できないようです。

#### さいごに

今回、調査担当者も予測していなかった竪穴式住居の発見で、十分な検討や資料作りもできないまま、皆さんに見ていただく事になってしまいましたが、今後検討を深め、報告書にまとめたいと思います。

これらの住居が、孤立したものなのか、まだ未調査の東隣の部分にも住居があり、「ムラ」を形成していたのかは、さらに長い目で調査の進展を待つて考えていかなければならないものと思います。



第13b面  $S=1/400$



写真1 調査区東半第13面（南西から） 中央に住居1が見える



写真2 調査区東半第13b面（南西から） 左奥に住居2が見える



写真3 住居1（西から） 周りに土盛りが巡る（周堤）。竪穴は不整形でおよそ径4mほどか。住居としては小型です。中央の穴は炉跡、その両側に2本の柱穴



写真4 住居2（西から） 竪穴は円形で径7m。竪穴の内側に小さな段が巡る。中央に炉跡、その他の穴は柱穴などか。掘ってみたところ、4本柱の建物になるようです。